

# 邪馬台国と狗奴国はその後どうなったか

## —スサノオは狗古智卑狗—

田口 紘一

目次・	
はじめに	1
仮説の重要性	2
女王卑弥呼共立	4
女王国の位置	5
塞曹掾史張政登場	6
張政の戦略	7
卑弥呼の死	9
次の戦略・豊国との連合・合併	9
宗女台与と神功皇后	10
卑弥呼の冢	12
降伏条件・スサノオへの罰・天孫降臨	15
肥国と日向国	16
豊国・投馬国	17
神功皇后の新羅征討	18
張政の帰国	20
神武天皇の東遷	21
作られた系譜	22
考古学的知見との合致	23
おわりに	23

### はじめに

「魏志倭人伝」は、西暦二四八年ころ、女王卑弥呼が死んで、台与が後を継いだところで終わっています。考古学上では、二世紀は、北部九州で奴国が栄え、中国後漢皇帝から「漢倭奴国王」の金印を下賜された国と考えられています。四世紀に入ると奈良県大和の地で西日本を統一するような国が出現しています。その間の三世紀の変遷がよくわからないので、議論になっています。卑弥呼の死、台与の相続は、ちょうどその三世紀の半ばのことです。

卑弥呼・台与が、その後の大和朝廷に関係しているのならば、『古事記』や『日本書紀』（今後「記紀」ということにします）にその経緯の痕跡が描かれている可能性があると考えられます。記紀は我が国の

最高権威者の家系であるところの天皇家のことが主に描かれています。ですから、当然のことながら、天皇家が我が国の最高権威者であることが正当であることを喧伝するために作られたとあってよいでしょう。それゆえ、この記紀の内容を分析するにあたっては、不都合な真実は削除するか、話をぼかすような描き方をしている可能性も考えて置かねばなりません。ですから、記紀には直接、卑弥呼や台与の名は出てきませんが、その名がなくても、名を変えて登場しているかもしれず、経緯もすこし違った話になっているかもしれないのです。

もし、卑弥呼・台与が大和朝廷に関係がないのであれば、上記のようなことを考えて記紀の中を探しても全く出てこないでしょう。津田左右吉氏は「記紀の記載の上代の部分によってわれわれの民族の上代史は知られない、ということがわかるのである。われわれの民族の重要な一部分を形づくっているツクシ人の上代の事績（筆者注：『魏志』倭人伝を指す。）、しかもそれは、政治的にも文化的にも、われわれの民族の全体にとって極めて大きいはたらきをした事柄であるにかかわらず、その事蹟が、毫も記紀にあらわれていないからである。」として、卑弥呼や台与は記紀つまり大和朝廷とは関係のないツクシ地方の政権と考えています（『古事記及び日本書紀の研究』毎日ワゴンズ 2018）。邪馬台国近畿説をとる研究者にはこの説を支持する方が多いのですが、私は、本論で述べるように、記紀の中には卑弥呼や台与のみならず、敵対していた狗奴国や卑弥呼のあと一時的にあとを継いだ男王、それに帯方郡から狗奴国に対処するために派遣された張政までも、名を変えて登場することを見つけ出しました。大和朝廷は、まさに卑弥呼・台与からはじまったと考えられるのです。

## 仮説の重要性

物事の真相を探る場合に、「仮説あるいは前提の設定」は重要だと思います。

先に、魏志倭人伝の帯方郡から卑弥呼女王国までの行程の解明にあたり、従来多くの人が「魏志倭人伝は正しく書かれている」あるいは「魏志倭人伝に書かれていることを綿密に分析すれば解が得られる」というような「仮説」のもとに行程の解明を求め、これまでに実に多様な解が提示されてきました。しかし、多くの人が納得するような解が得られていないのが現状です。

私は、この行程の解明にあたり、「魏志倭人伝は陳寿が複数の史料から行程を考えだしたもの」という仮説を立てました。つまり魏志倭人伝に書かれている行程は「複数の史料から陳寿が作り出したもの」としたのです。そうすることによって従来の説とは全く異なることが浮かび上がってきました（2020年1月、本蘭掲載）。この仮説については、中国の陳長崎氏（中国魏晋南北史学会副会長）が「魏志倭人伝は、魏の時代について書かれた文章そのものではない。中国では、倭国についての情報がきわめて乏しく、それで、いろいろな時代の情報を掻き集めて、倭国像を作った。いくつかの時代の史料が融合した可能性が高い。漢代・三国時代・西晋時代の記述が混在している」（今年1月16日、TBS6 “諸説あり！邪馬台国SP” で再放送）との発言に裏付けられ、漢文に疎い私としては、こういう見方、仮説の立て方は正しかったのだと確信したところです。

今回、邪馬台国、狗奴国のその後についても、従来の仮説とは、やや違った仮説を設定しています。その一つは、歴史的事実を記紀から探るということです。これは安本美典氏も提唱しておられますが、私も「記紀」は神話を含めて、歴史として大事なところは事実を比喻して語られているところもある、と考えています。「記紀」はそれを作成した人々が年月をかけ、渾身の知恵を絞って作りあげたものと考え

たいのです。表面上外国の歴史書にあるような話を引用したとしても、わが国の事実を比喻するのに適した話を取り上げたと考えています。やや後の話になりますが、『宋書』に出て来る倭王「武」の上表文、みごとな文ですが、実際は中国の名文を借用し、主語や目的語をすり替えてつくったものだといわれています。当時の人は漢文を作成するのに、当然のことながら中国人の書いた漢文で学習するのです。その中で使える名文があれば借用するのは当たり前で、それを繰り返しながら立派な漢文が作れるようになるのです。現在の外国語学習も同じことをやっているのではないのでしょうか。優れた文章をつくれるように他人の優れた文章に学ぶのは正当な方法だと思うのです。決して非難するにはあたらないということです。

ちょっと横道に反れましたが、その二の仮説は、「『記紀』のもとになる物語を作った天皇がいる」、ということです。津田左右吉氏も「記紀」のもとになる物語があるとはしていますが、『古事記』が安閑天皇以降の事績が書かれていないことから、安閑以前のことがほぼ忘れられたころ、つまり、欽明天皇のころにそれまでの伝承をまとめてつくられたとしています（前掲書）。現在これがなかば通説になっているようです。しかし、当時、皇室内での皇位争奪は命がけであったのです。雄略天皇は皇位継承の可能性のある他の皇子たちをほとんど殺してしまいました。現在でも肉親を殺された子孫の方はわずか数十年でそのことを忘れることはないでしょう。当時だって同じでしょう。ほとぼりがさめるためには百年は必要です。ほとぼりがさめたときにつくられたと考えるなら、推古朝が適切なのです。『古事記』がなぜ推古天皇で終わっているのか、については、津田氏は、推古天皇の後、まもないころに追補されたのだろう、としています。

私は、推古朝の時に「記紀」のもとになる物語がつくられた、という仮説を設けました。実際『日本書紀』には、「推古二十八年、この年、皇太子（厩戸皇子）と馬子大臣が相議して、天皇記および国記などを記録した」とありますし、「冠位十二階」が制定され、その官人の規範を示す「十七条憲法」が制定されています。また、隋書をみれば、当時推古朝は隋から独立志向であったことが読みとれますし、独立国家を鼓舞するための歴史書作成という作成動機も充分あると思われるからです。ところが現在の風潮は厩戸皇子の事績否定論が横行している観がします。津田氏もその一人で、厩戸皇子作成とされる「十七条憲法」の中に、当時なかったはずの「国司」という役職名がはいっている、という理由で、厩戸皇子の憲法作成を否定するだけでなく、「天皇記・国記など」の作成も否定してしまっています。そしてそれに同調される方が多いのは解せません。『日本書紀』には「皇太子と馬子が相議して」と明記されているにもかかわらず、「このような物語を厩戸皇子ひとりではできないはずはない」という方もおられます。私は、「記紀」のもとになる物語の作成を推古朝としたら、どのような矛盾点が生じるのであろうかと思い、検討をはじめたのですが、結果は、合理的説明は得られても矛盾点は見つけることはできませんでした。もともと『古事記』のもとになった「帝紀・旧辞」は漢文体ではなく、国語で書かれていたとするのが定説です。先の「十七条憲法」のことも、漢文で書かれたものは伝わっておらず、書紀編纂者が伝えられている内容をあらためて漢文に翻訳したと解釈すれば合理的に説明できるのです。新しく漢文化されたことは、森博達氏が「十七条憲法」の中に見られる漢文の日本的特徴（倭習）が推古紀の他の文章と共通していることを指摘されていること（『日本書紀の謎を解く』中公新書 1999年）から明らかなのです。「十七条憲法」の漢文体が『日本書紀』編纂者によってつくられたかといって、その内容まで編纂者の造作とは決めつけられないのです。「国司」云々も『日本書紀』編纂の目的が「天皇家の支配者としての正統性」を鼓舞するものであったとすれば、書紀編纂時の役職名で示すのは当然で、一般の人々にとって、どんな職なのか

わからない推古朝という古い時代の役職名をわざわざ記す必要はなかったと考えられるのです。「天皇記」も同じ理由です。厩戸皇子らが作ったものは「天皇記」という名ではなかったかもしれません。もし「○○記」だったとして、日本書紀に「○○記」と書けば、「この『○○記』は『天皇記』のことである」という註釈を付けなければ中身がわかりません。内容を示す言葉として「天皇記」と書けば何等説明する必要がなくなるのです。古代に「中国」という国はなかったにもかかわらず、現在、「古代中国では」とよくいうことと同じです。そもそも「厩戸皇子らが天皇記を作った」としたのは日本書紀の編纂者なのです。彼らがそのように認知していることを否定するのであれば、「なぜ、日本書紀の編纂者は『厩戸皇子らが天皇記をつくった』という偽りを書いたのか」を合理的に説明しなければなりません。

この「記紀」のもとになる物語の作者を特定することによって、作者の意図や思いを想像することができるのです。また創作部分を指摘することも可能になるのです。たとえば第二代から第九代までの天皇は架空だという説を掲げる人がいますが、もし、天皇の系譜が伝承であったとすれば、これらの天皇が架空であるはずはないのです。伝承の中に架空のものを誰かが入れたとしてもそれを天皇家が承認するはずはない、というのが私の考えです。架空の系譜が代々伝わっているとすれば、それは、あるとき有力な天皇が「これが天皇家の系譜だ」と強力に示し、以降の天皇がそれを承認したというケース以外に考えられないのです。それ以外にも、神代史の部分においても主要な神々の中には実在の誰かを比喻していると考えられることや、厩戸皇子や馬子が偽りの編纂方針（国の起源を実際より古く設定することや不都合な事績を隠蔽すること）を指示したとしても、それを受けた編纂を担当する学者たちは、表面は指示に従ったとしても、その中に、真実を忍び込ませようと腐心したかもしれない、ということも想像できるのです。歴史書の作成ですから、密かに真実を忍び込ませることに厩戸皇子や馬子も反対はしなかったでしょう。『日本書紀』によれば、当時の推古朝には高麗の僧、慧慈をはじめ、僧隆、雲聡、曇徴、法定が帰化しており、また百済の僧、慧聡、観勒が来倭しています。また、数回にわたり隋へ人を派遣して隋の文化の吸収を図っているのです。中国の歴史書も持ち帰ったでしょう。これらの中国や朝鮮半島の歴史をよく知っている知識人を歴史書編纂者に任命し、わが国の歴史書を作ろうとしたのだと思います。これだけのスタッフが揃った時代は他にないのではないのでしょうか。

最後にもうひとつ、神話の項、歴史の項を問わず、歴史の大筋は伝わっており事実ですが、細かいところは伝わっていないので、造作されたと考えています。

以上、ながながと仮説の説明をいたしました。私の説を理解していただくためには、その前提となる仮説を承知しておいていただかなければならないと思ったからです。

## 女王卑弥呼共立

魏志倭人伝には、つぎのように、女王共立までの経緯が書かれています。

「その国は、本来、男子を王として、七、八十年続いたが、その後、倭国は乱れ、数年にわたり相攻伐するありさまだった。そこで、一人の女性を共立して王とした。名を卑弥呼といい、鬼道を使い民衆を惑わすことができた。年齢は長大で夫はいない。弟がいて国の統治を補佐している。王になって以来、彼女に会える者は少なく、婢千人が側に侍り、男子一人のみが飲食の配膳や伝辞のために出入りしている。宮室や楼観に住み、城柵は嚴重に設けられ、常に武器をもった守衛がいる」。

共立した理由は述べられていません。しかし、巫女である女性を王として共立するという手段を採っ

てまで、まとまらなくてはならない事情が生じたためだという想像はできます。それは何でしょうか。分裂した集団がまとまる時というのは、共通の外敵があらわれた時です。明治維新も黒船という共通の敵の出現によって、諸藩がまとまったのです。少なくとも旧幕藩体制ではだめだということは、大部分の人たちの一致した考えであったと思われまます。

この場合の共通の敵とはどこでしょうか。後の流れから判断すると「狗奴国」ということになるのではないのでしょうか。魏志倭人伝には、「その（正治）八年（二四七）、太守王頌が官（帯方郡）に着任した。倭の女王卑弥呼はもともと狗奴国の男王卑弥弓呼とは不和であった。倭は戴斯・烏越等を郡に遣わして、相攻撃している状況を説明した。」と書かれていて、狗奴国に攻められていたことがわかります。狗奴国の脅威によって連合の必要性が生じたのではないかということは、松本清張氏も述べています（『吉野ヶ里と邪馬台国』NHK 出版 1993 年）。

しかし、政治の形態は、小国王たちが集まって協議をする合議制だったと思われまます。合議で決まった案を卑弥呼に提示し、神の裁断を仰ぐ。この時代、事を実行するのに神の裁断、つまり占いをしていたと、考えられます。占いをして良い結果がでなかったので、中止したという記事は日本書紀のなかでも随所にできます。

倭人伝には支配者として「王」と「官」が出てきますが、「王」は女王卑弥呼と狗奴国の男王・卑弥弓呼だけです。したがって「王」は卑弥呼のような宗教的権威者と考えることができ、「官」がその国の政治を司る、政務王と考えることができます。狗奴国の官は狗古智卑狗と書かれており、熊本県菊池の地名を冠した菊池彦ではないかと思っています。

## 女王国の位置

私は、邪馬台国は、女王卑弥呼の国ではなくて、卑弥呼の後を継いだ台与が都を移した先である近畿の大和だとしました（拙著『記紀から読み解く魏志倭人伝とその後の倭国』海鳥社 2019、本欄 2020 年 1 月投稿論文「魏志倭人の行程・仮説をみなおしたら」参照）。つまり、日程で書かれたところは『日本書紀』神功皇后六十六年（二二六）、晋起居注の記事に「倭女王、通訳を重ねて貢献す」とあるので、そのときに得られた中国の情報で、邪馬台国はその時の台与の都で、大和国であったと考えました。投馬国は、投与国の間違いで台与の以前の都、豊国だと考えました。帯方郡から南へ水行二十日で投馬国（豊国）に着き、それから東へ水行十日で大阪へ着き、陸行一日で大和に着きます。帯方郡（平壤の南）から豊前（福岡県行橋市付近）まで水路約 1300 km、豊前から大阪まで約 450km、それを二十日と十日で行くとすれば、一日あたり 45～65km となり、当時の航海の速度としては妥当な数字と考えられます。しかし、陳寿は里数で示された帯方郡から倭国への記事と比べて、これは帯方郡から卑弥呼の女王国の都である邪馬台国への行程を日数で表したものと考えたのだと思います。陳寿は一里を四百余メートルと考え、帯方郡から朝鮮半島の南岸投馬国まで七千里（約 3000km）を水行二十日、そこから末羅まで三千里（約 1300km）を東ではなく南へ水行十日と考え、さらに、末羅から邪馬台国までの二千余里（約 800km）を陸行したと考えたため、史料に陸行一日とあったのをとうてい一日で行ける行程ではなく、一月の間違いと考えたためと考えられます。日と月は乱暴に書くと間違いやすいのです。したがって、ここでは卑弥呼のいた女王国について述べたいと思います。

卑弥呼のいた女王国の位置は、北部九州の筑紫といわれた地域だと考えています。それは上記倭人伝

に示されているように、「一、二世紀に七、八十年間栄えていた男王の国が一時期乱れ、その後、卑弥呼を女王として共立して再び統一された」というのですから、一、二世紀の国と卑弥呼の国は同じ場所、同じ規模であるはずで、その一、二世紀の国は西暦五七七年に金印を下賜された「倭奴国」あるいは一〇七年の朝貢した倭国は北部九州の国と考えられていることは、ほとんど異論がないのですから、卑弥呼の国はその「倭奴国」の後の姿ということになるのです。また、前述の論文で示していますが、女王は伊都国の近くにいたと推定しました。それは、帯方郡から伊都国までの記事が一つの資料で、その次の奴国・不彌国への記事、その次の日程で示された記事、はそれぞれ別の史料から陳寿が採用して、この順に並べたものと判断したのです。奴国・不彌国への記事はその構文が伊都国までの記事と異なっていること、日程の記事は里程と日程を混ぜて書くというようなことはきわめて不自然と考えたからです。これは、前提となる仮説を「陳寿は宮廷にあった複数の史料をみてこの記事を書いた」としたために生じた新しい見方です。倭人伝において、「伊都国は代々王がいるが皆女王に統属する」とあることから、伊都国は女王国の一部であることがわかります。私はその伊都国の位置を現在の武雄市に推定しています。魏志倭人伝において、「その国は、本来、男子を王として、七、八十年続いたが、その後、倭国は乱れ、数年にわたり相攻伐するありさまだった。」という記事から、「国が乱れる」ということは、「それまでの国王が統治権を失う」ということであるので、倭国が乱れる前、つまり後漢末の倭奴国の時代は、現在の糸島市を本拠とする伊都国王が倭奴国王でありましたが、倭国が乱れたとき、伊都国王は統治権を失い、一時、本拠である伊都地域（現、糸島市）から国外に逃れたのではないかと考えられます。魏志倭人伝には「末盧より東南に陸行すること五百里で伊都国に到る」とあります。末羅国の奥まった港、伊万里、ここは壱岐から水路七十キロほどで、倭人伝に示されている一里＝七十メートルほどとすれば、ちょうど千里ほどになります。その伊万里から東南に直線距離十五キロメートルのところに武雄市があります。道程で三十キロメートルほど、ちょうど倭人伝にいう陸行五百里に相当します。このルートは壱岐から末盧国を通過して有明湾へ抜ける最短ルートになるのです。武雄市の地形から推測するとそこも末羅の領地ではなかったかと考えられます。武雄市は有明海に面しており、最大六メートルになる干満差のとても大きな有明海では、引き潮に乗って沖にでて、満ち潮に乗って川をさかのぼれば、有明海北部沿岸のどの場所にでも半日で行くことができるのです。つまり、有明海北部沿岸のどこに女王が居ても、伊都国（武雄市）から半日で行くことができるということです。女王の居住した候補地は、肥前の吉野ケ里、筑後の朝倉、同じく筑後の山門が考えられます。そして、南にあったという狗奴国との争いという記事と、「記紀」に記されている天照大神（後で述べますが、この神を卑弥呼・台与と考えています）と神功皇后（台与と考えています）の事績から、山門が卑弥呼の本拠地（出身地。女王として政治をした場所ではないかもしれない）であったが、狗奴国に攻められ、山門の都を落され、退却し、帯方郡の張政が来倭した時には、吉野ケ里または朝倉に退去して、筑後川を挟んで狗奴国と対峙していたと考えています。

## 塞曹掾史張政の登場

魏志倭人伝の最後、つまり前述の「狗奴国との間が不和で相攻伐した」という記事のあとに「そこで、（帯方郡は）塞曹掾史張政らを遣わし、詔書・黄幢を整え、難升米に拜仮させ、檄で告諭した」とあり、その後に「卑弥呼以て死、卑弥呼の大きな墓をつくった。直系百余歩、殉葬した奴婢百余人」つづいて「さらに男王を立てたが、国中が服さず、互いが誅殺しあい当時千余人が殺された」「そこで、卑弥呼の宗女

として台与、年十三歳、を王として立てると、ついに国中が鎮定した」「張政らは檄を以て台与に告諭した」「台与は倭の大夫の率善中郎将掖邪狗ら二十人を遣わして張政らを送り届け、臺（皇帝の居場所）に詣でて、男女の生口（奴隷）三十人を献上、白珠五千、孔青大句珠（孔の開いた大きな勾玉）二枚、異文雑錦二十匹を貢献した」と書かれ、ここで倭人伝は終わっています。

張政が出した檄や告諭の内容は書かれておらず、対立している狗奴国との関係がどうなったのかも書かれていません。何かあわただしく終わっている感じがします。拙著では、編者の陳寿が帯方郡からの使者の言動は書くにおよばず、と思ったのではないかと書きましたが、今思うところは、最後の文の前に、実は説明文があったものを、陳寿が提出後、その部分にまずいことが書かれていたので削除されたということの可能性もあると考えています。

張政は、塞曹掾史という塞の下級兵士という低い身分ですが、女王国苦戦の情報に対してその救援のために派遣された使節団の長を務めています。そして、詔書と黄幢を倭の長官難升米に渡し、檄をつくって、これを告諭しています。「檄」とは古代中国では、「招集または説諭の文書」といわれています。その後、卑弥呼が死んで台与が新女王として立ってからも、台与に対して檄を書き、告諭しています。これはまさしく軍師としての行動ではないでしょうか。

張政は、帯方郡から派遣された魏の郡使です。しかもこの場合は卑弥呼のほうから援助を求めているのです。彼は、魏国皇帝から女王国の立て直しのための諸策実行の全権をゆだねられていたと考えられます。張政は、その出自がどうであれ、倭国にいる間は、倭国内の最高権力者なのです。多くの人はこのことをよく理解していないように思えます。そのため、通説では、単なる帯方郡の小役人として取り扱われ、檄については、ほとんど無関心です。せいぜい、狗奴国との和睦を勧めたのではないかという程度です。

西暦二四七年ころの魏は、蜀との争いで、蜀の軍師諸葛亮孔明に散々に攻略され、一人の優秀な軍師が万の兵士に勝るということを骨身に浸みて実感していたころです。孔明が没したのは二三年ですから、それからわずか十数年後のことなのです。魏の国内には軍師になることを夢見て日々研鑽に励んでいる数多くの若者がいたに違いありません。

すでに、前の朝貢（二四三年）によって、帯方郡には倭国の援助のために、皇帝から詔書と黄幢が届いています。それを倭国に届けるにあたっては軍事的能力に長けている人物を送るのが自然のことではないでしょうか。凡人を送ってもよい情勢ではないでしょう。しかし、軍師として認められた人物は呉や蜀との戦いに赴いてもらわねばなりません。張政は塞の小役人として働きながら、軍師としての才能を磨いており、それが帯方郡太守の目に留まり、抜擢されたのだと思います。

魏志倭人伝では、最後に、台与が倭の将二〇人をもって、張政を本国に送り届け、京（洛陽）にまで行っています。これは張政の施策が大成功を収め、台与はそのお礼に朝貢し、倭国王として正式に認めてもらおうと同時に、張政はその成果を皇帝に報告し、その功績を認めてもらおうとしたと考えられます。倭国からの朝貢団はその証言者にもなるのです。

## 張政の戦略

さて、その張政の戦略はどのようなものであったか、魏志倭人伝には檄をもって告諭したことしか書かれていません。従来からの大きな謎の部分です。しかし、この謎を解かなければ女王国や狗奴国のその

後のことは解明できないでしょう。

私は、魏志倭人伝に書かれていること、つまり、卑弥呼や台与、あるいは張政の活動が、その直後に現れる大和王権に関係があるのならば、それは「記紀」に何らかの痕跡が残されているのではないかと考えました。また私は、厩戸皇子と馬子が「記紀」のもとになる物語をつくったのではないかと見当をつけています。もし語るにまずいことがあれば、比喩の話にするなど、内容をぼかしてすべてを語らないにしても、なんらかの事実を語っているのではないかと考えました。厩戸皇子や馬子にしてみれば、中国の援助を受けて狗奴国に勝利したというようなことは、あからさまには書きたくはないでしょう。うまくぼかして描こうと考えたのではないか。このように物語の作者の目星をつけると、作者の思惑を考えることができます。人間の歴史は、人間の思惑と行動によってつくられたものです。それが考古学的遺跡・遺物に残るのはほんの一部です。考古学的見地だけでの歴史の解明は困難をきわめると考えています。

実際、「記紀」を注意深く読んでいくと、不思議な事とか、矛盾する記述が見つかります。たとえば、「神功皇后が応神天皇の生まれるのを腰に石を挟んで二カ月遅らせた」という記事です。「記紀」ともに書かれており、これは何を意味するのでしょうか。また「継体天皇は応神天皇の五世の孫」とありますが、その系譜は示されていません。継体天皇が皇位を継ぐにあたって、その正統性を示すために、必要不可欠な、とても大事なことなのになぜ示されていないのでしょうか。

魏志倭人伝のなかで卑弥呼が活躍したのは三世紀半ばのことです。それ以前に日本列島、少なくとも西日本を統一した国はなかったというのが、古代史学者の一致した見解だと思います。三世紀に入って西日本を統一した国家が生まれた、邪馬台国近畿説と九州説とでは少し異なり、近畿説は三世紀前半から、九州説は三世紀後半になってからということでしょうか。卑弥呼女王国が近畿にあったか、九州にあったかで考えが異なっています。近畿説の人は纏向遺跡が三世紀前半から出現したとみられることを根拠にしていますが、「記紀」には神武東遷の前に饒速日命が大和に天降ったと書かれているし、神武の東遷の理由も「栄えている国が東方にある」ということなので、九州説であっても纏向遺跡が三世紀前半から栄えていたことになんら支障はないのです。

「記紀」は日本の歴史を、天地開闢から神話として語られています。そして日本列島やその山川草木とそこを支配する者を生んだイザナギ・イザナミまでを神代七代としています。それでは、それ以降のアマテラス（天照大神・天照大御神）などは何なのでしょう。なぜ、イザナギ・イザナミのところで「神代七代」と「区切り」を入れたのでしょうか。これは、アマテラス以降は実在の人物を神に置き換えて物語をつくった、ということを示しているのではないかと考えることができます。もう一つ、見逃してはいけないことがあります。それは伊勢神宮です。天皇家の始祖神としてアマテラスが祀られていることです。なぜ、天皇家の始祖神が『古事記』の最初の神「天之御中主神」あるいは『日本書紀』の最初の神「国常立尊」ではなくアマテラスなのでしょう。アマテラスは天皇家の始祖を表しているのではないかと考えられるのです。もし、アマテラスが架空の神であったなら、天皇家は誰がつくったのかもわからない架空の神をなぜ始祖神として祀ってきたのでしょうか。その説明が必要になります。

卑弥呼が「記紀」のなかのアマテラスを指すとする人は、過去には白鳥庫吉、和辻哲郎氏など、現在では安本美典氏らが唱えておられます。『日本書紀』には「神功皇后紀」に魏志倭人伝の卑弥呼に関する記事が引用されており、神功皇后の時代と卑弥呼の時代を合わせています。しかし、卑弥呼以外の登場人物、台与、その前に立った男王、そして張政や狗奴国王について、「記紀」のなかであてはまる神や人の比定はほとんどされていません。もし「記紀」が卑弥呼をアマテラスで表したのなら（アマテラスでなく



てもよいのですが)、台与、男王、狗奴国王、張政なども何らかの形で表しているはずですが。こういう人々を探さなければ、「記紀」によるその後の展開はおぼつかないこととなります。逆に、そういう人々を比定できるのであれば、その信憑性は一気に高まるのではないのでしょうか。

## 卑弥呼の死

卑弥呼の死については、「すでに死んでいた」「当時皆既日食が起こったため、祭祀の靈力が衰えたとして殺された」とする人たちがおられますが、張政の檄が原因とした人は作家の松本清張氏が最初のように、その後、「以て死す」という語は、奥野正男氏は魏志の文例から（『邪馬台国はここだ』梓書院）、岡本健一氏は『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』にでてくる百十三例のほとんどが例外なく「尋常の死ではない」ことをつきとめられています（「卑弥呼の冢と鏡——倭人伝の記事『以て死す』の証言」『三角縁神獣鏡・邪馬台国・倭国』新泉社）。魏志倭人伝には「詔書と黄幢を難升米に預け、檄でもって告諭した」のあとに、「卑弥呼以死」と書かれているのです。私も檄による非業の死だと考えます。檄は難升米に出されています。卑弥呼は共立されて女王になっているのです。だから、卑弥呼の女王更迭・死罪の檄も共立した諸将に出されたのです。ここだけは、檄の内容がはっきりと書かれたものと思います。「卑弥呼更迭・死罪」の理由ははっきりしています。卑弥呼率いる女王国は負け戦をした、その責任を誰かに取らせねばならない、と張政は考えたと思います。張政にしてみれば、卑弥呼は占いによって戦略を決めている、そのようなことで勝てる道理はなく、魏の軍師としてはとうてい許されることではなかったのです。倭国を強い国にするためには、まずそのリーダーを代えねばならない、と考えたのだと思います。

## 次の戦略・豊国との連合・合併

「記紀」ではどのように表されているのでしょうか。アマテラスはスサノオとの誓約のあと、スサノオに田畑や宮殿を荒らされ、天岩戸にかくれた、とあります。天岩戸隠れを卑弥呼の死に、したがって、天岩戸に隠れる前のアマテラスを卑弥呼に、天岩戸からでてきたあとのアマテラスを台与に当てる人が多いようです。私もそう思います。『日本書紀』ではアマテラスを「大日靈貴(オホヒルメノミコ)」「天照大神」「日神(ヒノカミ)」と三通りの名で書かれています。「大日靈貴」は、その誕生の時に一度でてくるだけです。その後、本文は「天照大神」で通しています。卑弥呼は、魏志倭人伝には鬼道を行なう巫女と書かれています。「大日靈貴」の「靈」は「靈+女」つまり「巫女」を表すとされています。アマテラスの前半生は卑弥呼を表すとすると、「大日靈貴」の名はぴったりと合うのです。そうすると田畑や宮殿を荒らしたスサノオは、女王国と抗争状態にあった狗奴国ということになりはしないのでしょうか。狗奴国には男王卑弥弓呼と官の狗古智卑狗がいたとありますが、男王が卑弥呼と同じ祭祀王と考えれば、実際の戦闘の指揮を執っていたのは狗古智卑狗だったと考えられます。

さて、その次の檄はどのようなものであったのでしょうか。魏志倭人伝には「さらに男王を立てるが、国中が服さず、相誅殺し、千余人が殺された。そこで、卑弥呼の宗女として台与を立てたところ国中が治まった」とあります。ここも「記紀」のなかから痕跡を探っていくほかありません。

スサノオの話を追っていくと、アマテラスが天岩戸から出たあと、アマテラスを呼び戻した神々はスサノオを「千座の置き戸を科し、髪、爪を切って出雲へ追放した」とあります。スサノオは、アマテラス

の田畑や宮殿を荒らした凶暴さは影をひそめ、きわめて従順に何の抵抗もせず出雲のほうへ下っているのです。

このことを台与にあてはめると、台与が次期女王になっただけで、狗奴国は戦意を失い退散し、降伏したことになる。これが張政の軍略だとすれば、どのようなことを行なったのであろうか。ここは気付くまでに時間を要しました。

自国を強くするための戦略のひとつに、他国との同盟・連合があります。台与は、他国との同盟によって生まれた新女王ではないだろうか。台与は「トヨ」と読まれ、女王国（筑紫国）の隣国である豊国（豊前・豊後、現在の福岡県東部と大分県）の「トヨ」と同じ音なのです。つまり、張政は、豊国との連合・合併を図り、女王国を今までと比べものにならないような強大な国にし、狗奴国を委縮させ、その後、狗奴国に降伏をもちかけようとしたのではないか。まさしく、「戦をせず、敵のすべてを奪いとる」という「孫子の兵法」のとおり戦略です。

蜀の諸葛亮孔明が呉と連合して魏に対抗し、三国の中でも最も優勢であった魏が「赤壁の戦い」で思わぬ大敗北を喫したのは、つい四〇年前のこと（二〇八年）です。魏の張政にとって、この事件は何度も聞かされ、脳裏から離れることのなかった事件のはずです。強国狗奴国との戦いにおける戦略として、真っ先に豊国との連合を考えてもおかしくありません。

そう考えたときに、一気に霧が晴れた気がしました。傍証が次々とでてくるのです。

『日本書紀』では、アマテラスと同等の器量をもつ神として「月の神」を登場させています。つまり、書紀の本文では、イザナギとイザナミが大八洲国や山川草木を生んだのち、日の神＝大日靈貴（オホヒノミコ）（アマテラス）について、「月の神」を生んで、日に並んで治めるのがよいと天に送ったとあります。そして、最後に生んだスサノオはたいへん無道で天下の君に値しないので、根の国（出雲と思われ）に追放しています。『日本書紀』には一書が多く、「月の神」の治めるところは「青海原」もありますが、「日と並んで天」もまたあります。『古事記』では「夜の食国」となっています。一方スサノオは「根の国」「天下」「青海原」と一書では書かれ、『古事記』では「海原」を治めるようにいわれましたが、泣き叫んで治めず、のちに、アマテラスの田畑・宮殿を荒らしたので高天原から追放されています。

いずれも、月の神はアマテラスと同等か、それに準じた地位にあり、スサノオはいずれも大きく格下の地位になっており、最後は根の国へ追放されています。

種々の伝承のあるなか、『日本書紀』の編纂者たちが、本文を「月の神は日と並んで天を治める神」としたのは、理由があるはずと考えられます。

アマテラスが卑弥呼（女王国）を表し、スサノオが狗古智卑狗（狗奴国）を表しているのであれば、月の神は台与（豊国）を表しているのではないのでしょうか。この三人が兄弟としているのは、のちに合併して一つの国になったことを暗示しているのではないのでしょうか。月の神が台与ならば、卑弥呼の後を継いだのですから、卑弥呼と同等と考えられます。

## 宗女台与と神功皇后

前節でアマテラスと同等とされた月の神は、その後でてきません。しかし、アマテラスの天岩戸隠れの話から、岩戸に隠れる前を卑弥呼、岩戸から出たのちを台与と考えることができます。

しかし、「台与」らしき女性がもう一人いるのです。神功皇后です。このように言いますと、アマテラ

スと神功皇后は時代が違うではないか、というご意見ができそうです。実際、卑弥呼をアマテラスに当てた方は、台与を神功皇后にあててはいらっしゃらないようです。それは前提となる仮説として「天皇の系譜は伝承による」と考えておられるからです。私は、前述のように、『記紀』のもとになる物語をつくらせた天皇がいる」という前提で考えているのです。天皇の系譜もつくられたものかもしれないと考えることができるのです。追々述べますが、結論を先に言いますと、天皇家の系譜は祭祀王家としてアマテラスから神功皇后（台与）につながり、神武天皇から成務天皇までは「政務王」として物語の構成上挿入されたものと考えています。挿入せざるをえない事情もあるのです。

『古事記』仲哀天皇記では、「仲哀天皇は、穴門の豊浦宮（山口県西部）、および訶志比宮（福岡市の香椎宮）で政治を行なった」と書かれています。特筆されることは、大和のことは何も書かれていないことです。歴代天皇の政治を執った宮は大和あるいはその周辺です。それが仲哀天皇は大和の地から遠く離れた山口県の豊国に属する豊浦宮で政治を執ったと述べているのです。仲哀天皇は豊国王と言わんばかりの書き方なのです。『日本書紀』においても筥飯宮(ケノミヤ)という敦賀の行宮と南海道巡幸中の紀伊の徳勒津宮(トコツミヤ)が示されているだけで肝心の本宮はどこにあるのか書かれていないのです。その南海道巡幸中に熊襲の謀反を聞いて九州に降ったと述べているのです。また『日本書紀』には、仲哀天皇がそれ以前の天皇家との断絶を暗示することが書かれています。仲哀天皇の出自は日本武尊の第二子とされ、成務天皇の四八年に皇太子となり、そのとき三歳であったと書かれています。つまり成務天皇一八年に生まれたこととなります。一方、日本武尊は景行天皇の第二子で、景行天皇の四三年に没したと景行天皇紀にあります。そうすると、成務天皇は景行天皇が没して（景行六〇年）から即位したのですから、父の日本武尊が没してから少なくとも三六年後に生まれたことになるのです。少なくともといったのは成務天皇の没年が成務六〇年で享年一〇七歳、景行天皇四六年のときに二四歳とある（成務天皇紀）ので、それが正しいとすれば、成務天皇の即位は景行天皇が没してから九年後ということになるからです。ともかく、仲哀天皇が日本武尊の子であることはありえないことになるのです。

話を神功皇后に戻します。『日本書紀』神功皇后紀は西暦二〇〇年から二六九年のこととしています。ちょうど卑弥呼と台与が活躍したであろう期間です。そして魏志倭人伝の記述を引用しています。『日本書紀』編纂者が、卑弥呼と台与を意識してここに登場させたのは間違いないでしょう。神功皇后は仲哀天皇の皇后であり、はじめ敦賀にいましたが、仲哀天皇から熊襲を討つので穴門へいくように連格を受けたと『日本書紀』にあります。神功皇后の和風諡号は氣長足(キカガタシ)姫命というので、氣長氏の本拠地である敦賀から出発させたものと考えられます。

そして、豊浦宮についたあとの訶志比（香椎）宮への移動については、魏志倭人伝にでてくる豊国の男王と台与が筑紫国から迎えられる場面を表しているように思えてならないのです。

『日本書紀』では、仲哀天皇と神功皇后が筑紫国に入るにあたって、筑紫の伊都県主の先祖、五十迹手(イテテ)が大きな賢木(サキ)を船に立て、八尺瓊(ヤサカニ)（勾玉）・白銅鏡・十握剣をそれにつけて、穴門の引島（下関市彦島）まで迎えにいった、とあります。勾玉・鏡・剣は三種の神器で、これを献上するということは、仲哀天皇と神功皇后を王として迎えたということでしょう。

筑紫に入ったあと、仲哀天皇は熊襲を討とうとしますが、神功皇后に「今熊襲を討つ必要はない。よく私を祀って、新羅へ行けば戦いをしなくても、金・銀・彩色が得られる。熊襲も服従する」という住吉の神の神託が降りました。仲哀天皇はこの神託を理解できず、熊襲を討とうとしましたが敗北し、時を経ずして、突然亡くなりました。神功皇后は筑紫国内の「安」というところにいた反発分子を討ち、さらに山

門島の田油津媛を討ちました。その後、筑紫国内を巡幸しています。

このことを、張政の軍略として書き直すと、豊国の国王（仲哀天皇）に合併を申し込み、合併後の国王として迎えると提案した。仲哀天皇は、最高の条件なので、拒否する理由はなく承知した。しかし、筑紫国内では、当然反発する王が続出したであろうことは想像されます。国の主導権が豊国に奪われるからです。反発する小国王たちとの抗争で千人ほどの死者がでました。

そこで、打開策として、「豊国の王女、台与」を合併後の新女王として迎え、豊国王と筑紫国の小国王たちの合議制で国の運営を行うということで、收拾を図ったということになります。

その後、張政の「卑弥呼更迭死罪」の檄が出されたものの、筑紫国の王たちが卑弥呼を女王更迭はできても、死刑にはできかねていたのを、台与の軍が山門県へ行き、自国に引きこもっていた卑弥呼を討ったということになります。その時、卑弥呼とみられる田油津媛の兄は、一度は兵をかまえたが、その後逃げたとあり、それは、また、魏志倭人伝に出て来る卑弥呼の弟を連想させるのです。

また男王と見なされる仲哀天皇は、住吉神の止めるのも聞かず狗奴国（熊襲）を攻めようとしたので、住吉神に暗殺されたということになるのだと思います。この住吉神を張政に置き換えると、一気にリアルになります。張政は、台与を新女王にしたので、言うことを聞かない男王（仲哀天皇）は不要どころか障害になったので暗殺したのでしょう。

狗奴国は、その南に位置している、と魏志倭人伝には書かれています。女王国が筑紫国（福岡県西部＋佐賀県東部）であるならば、狗奴国は熊本県ということになるでしょう。熊本県の「クマ」は「狗奴国」の「クヌ」に通じ、熊襲の「クマ」に通じます。県名の由来ももとはここにあったのかもしれませんが。

さて、筑紫国・豊国の合併によって、兵力は倍増し、筑紫の将、難升米の傍には、魏の将の印である黄幢がひるがえり、魏の軍師も控えていて、さらに、豊国は、豊後地方までその勢力範囲だったとすると、狗奴国にとって、東の阿蘇方面から、狗奴国の本拠地とみられるところの、菊池地方が攻められる可能性も生じることになり、狗奴国は一転して非常に不利な状況に追い込まれてしまったことがわかります。狗奴国軍は退却し、本拠地防備に専念することになったと思われます。

つまり、アマテラスが天岩戸からでてきた（新女王台与が就任した）だけでスサノオ（狗奴国）は戦意を失ったのです。

## 卑弥呼の冢

台与は、豊国の王女で、卑弥呼の宗女として女王国を引きついだのですから、当然、卑弥呼を祖として祀らねばならないでしょう。しかし、筑紫国との今後の関係を考えると、良い関係が築けそうにはないことは察知したでしょう。筑紫国にとって、豊国との合併によって豊国の王女が女王を引きつぐということは、政治の主導権が豊国側に移ることになるからです。実際、その一つの表れとして、福岡県宗像市から沖ノ島を經由して対馬に向かう、いわゆる海北の道の航路が四世紀初めに開設されたということがあります。この航路は、宗像市と対馬の中間に沖の島があり、ちょうどよい目印になるのですが、その沖ノ島は全周絶壁で湾がなく、海が荒れた時の避難港がつかれません。ですから、沖ノ島には航海のたびに財宝を奉納して、その安全を神に願ったのだと思います。それで、沖の島には八万点にも及ぶ国宝となった遺物が眠る島となったのだと思います。九州から朝鮮半島に渡るには、博多あるいは松浦から壱岐島を經由して対馬に渡るのが、最も安全に渡れる航路であるのに、わざわざこの航路が開設されたことは豊

国を主体とする大和朝廷と筑紫国間の関係がうまくいってなかったことを裏づけるものと考えられます。少なくとも大和朝廷は博多あるいは松浦（唐津市方面）から壱岐島、対馬を経由する比較的安全な航路の使用を筑紫国から拒否されたのだと考えられます。台与が卑弥呼を祀るとすれば、それは豊国の中に設けたということは十分に考えられることです。

そして、卑弥呼がアマテラスであり、その魂が宿る鏡を伊勢神宮に祀っているのならば、卑弥呼の墓も過去に祀られた何らかの痕跡があるはずですが、そのようなことを考えて豊国の中を見渡せば、真っ先に浮かぶのは宇佐神宮内の小椋山（通称亀山）です。この山の頂上は東に寄っており、そこに上宮が建てられています。祭神は西側の一之御殿に八幡大神（応神天皇）、二之御殿に比売大神、三之御殿に神功皇后とされています（図1 御殿の配置）。

しかし、宇佐神宮には不思議なことがたくさんあるのです。まず御殿ですが、中央の二之御殿がもっとも立派につくられています。二之御殿の前だけに申殿があり、その前に設けられた南中楼門は勅旨門で、門は二之御殿の前にあり、開かずの門で、通常はその南中楼門の前でお参りをします。ですから二之御殿は門の前に拜所が設けられ、他の御殿は回廊の一部を切り開き拜所としています（図2 南中楼門拜所）。二之御殿の祭神、比売大神は、宇佐神宮では、宗像三女神を指すとしています。『日本書紀』の一書第三に「日神（天照大神）が生まれた三柱の女神を、葦原中国の宇佐嶋に降らされた。今、北の海路の中においでになる。名づけて道主貴という。これが筑紫の水沼らの祭神である」とあることから、そのようにしたと思われませんが、しかし、『日本書紀』本文や『古事記』には筑紫の胸肩（胸形、宗像）らが祀る神で、宗像の奥津宮（沖ノ島）、中津宮（宗像大島）、辺津宮（宗像市）に坐すとしています。先に述べた海北の道の航路です。また、筑紫の水沼地方（久留米市大善寺町、三潞町周辺）には宗像三女神を祀った神社は見当たりません。私は、この『日本書紀』の一書第三は、比売大神の正体を隠すために後で挿入されたものではないかと思っています。



宇佐神宮パンフレットより

図1 宇佐神宮上宮の御殿配置



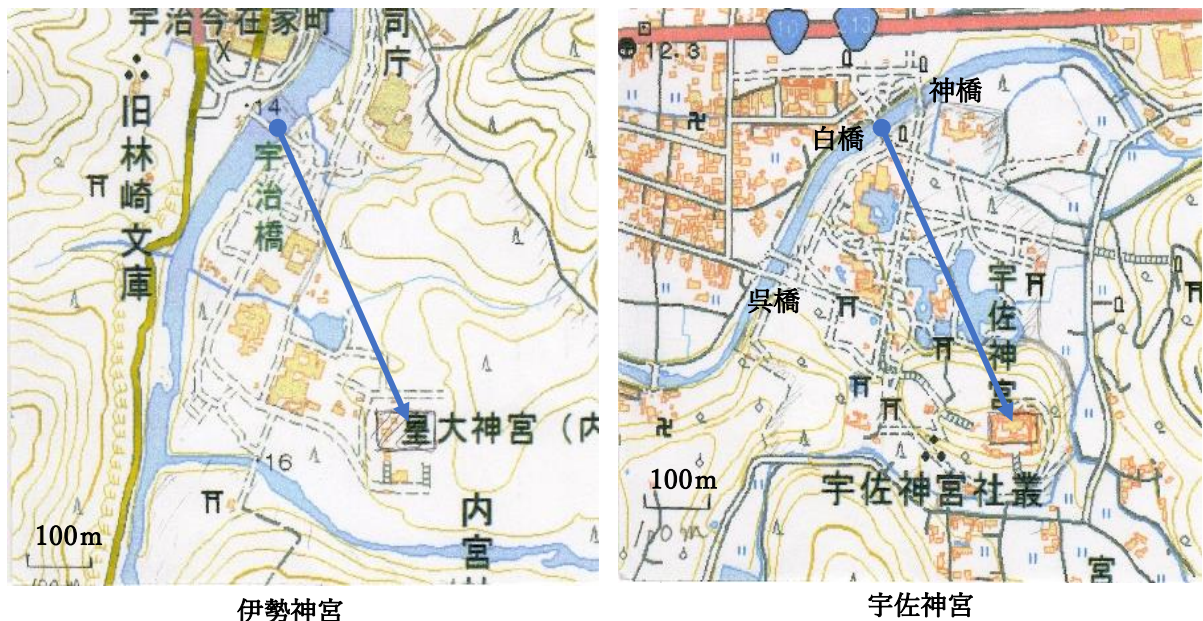
図2 宇佐神宮南中楼門拜所

小説家の井沢元彦氏も、伊勢神宮に祀られる天皇家の祖アマテラスは神格化された卑弥呼であると考え、宇佐神宮の出した「弓削道鏡を天皇に」という神託を確かめるため和氣清麻呂を派遣し、それが否定

されたいわゆる「宇佐八幡神託事件」から、また、宇佐神宮が伊勢神宮につぐ第二の宗廟として御崇敬されているということなどから、宇佐神宮の比売大神こそはアマテラスつまり卑弥呼の墓所と断定しておられます。

全国邪馬台国連絡協議会の前会長であられた鷺崎弘朋氏は著書『邪馬台国の位置と日本国家の起源』（新人物往来社）で、小説家の高木彬光氏がこの亀山に石棺が埋められているのを目撃した人から話を聞いたという（高木彬光著『邪馬台国推理行』〈角川書店〉）記事を引用されています。また、宇佐神宮宮司の御子息である宇佐公康氏は著書『古伝が語る古代史』（木耳社）において、二之御殿下に石棺があることを明言しておられます。ただし宇佐公康氏は、宇佐家の口伝によれば、それは神武天皇とウサツ媛の子の宇佐稚屋命（宇佐都臣命）の墓であって、御殿の祭神とは別のものであるとしています。この辺のところは宇佐家の立場からそうなっているのかもしれませんが、石棺確認時の詳しい説明から、第二御殿の下に石棺があることは間違いなさそうです。

さらに、宇佐神宮と伊勢神宮の関連について、調べると次のようなことがあるのです。それは伊勢神宮と宇佐神宮の境内の様子がそっくりだということです。図3にその比較を示しますが、その地理的位置については、両宮は都（奈良纏向と筑紫朝倉）から東方へ約80kmの地にあり、両宮の北は数kmで海に面しています。付近の地形は、両宮の北西側に川（五十鈴川と寄藻川）が流れ、その北西側の川を渡って参道が伸び、その橋から南東の地に正殿が建てられています。参道の経路も似ています。驚くべきことに、伊勢神宮の宇治橋と宇佐神宮の神橋の南西70mほどのところにある白橋から正殿の位置が全く重なることです（図3の矢印）。つまり、その方向と距離が全く一致するのです。白橋は神宮仲見世の街並みの様子から以前はその橋が神橋であったのではないかとと思われるのです。伊勢神宮は宇佐神宮をまねたのではないかとと思われるくらい似ているのです。

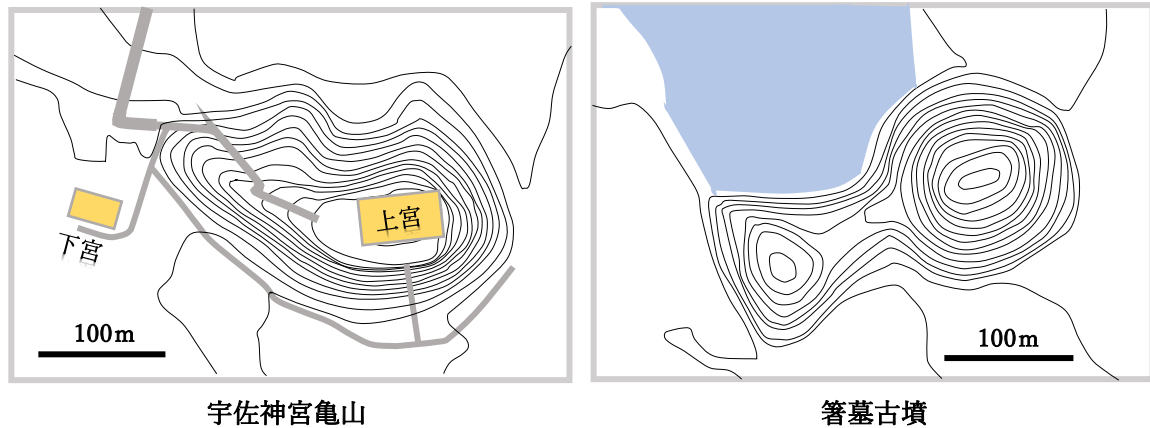


国土地理院地図より 矢印および宇佐神宮橋名は筆者記入

図3 伊勢神宮と宇佐神宮の境内

さらにいえば、大和の箸墓古墳とこの宇佐神宮の亀山の高さと同軸の長さとはほぼ同じで約 20m と 280m です (図 4)。亀山の大きさに合わせて箸墓が作られたという推理が可能なのです。

ともかく、宇佐神宮と伊勢神宮はこれほど密接な関係があるのです。伊勢神宮の祭神アマテラスが卑弥呼であるのならば、宇佐神宮はその墓所と考えられる所以です。



宇佐神宮亀山

箸墓古墳

等高線：2 m 間隔 国土地理院地図データソースより筆者作成

図 4 箸墓古墳と宇佐神宮亀山

## 降伏条件・スサノオへの罰・天孫降臨

さて、「記紀」にはスサノオに与えた罰として、「千座の置き戸を科し、髪や手足の爪を抜いて追放した」とあります。「千座の置き戸」とは何でしょうか。通説は「たくさんの台の上に乗せた贖罪のための品物、あるいはお祓い」としていますが、あまり現実的・具体的ではありません。単純に倉庫と考えたらどうでしょうか。数が千と非常に多いので、数がたくさん必要な倉といえ、これは米蔵ではないかと考えました。米蔵をたくさん出せということは、領地割譲の要求ではないだろうか。どの地の割譲であろうか。「記紀」から探すと天孫降臨の地、日向が浮かんできました。狗奴国は日向を含めた九州の中部を治めていたところの多くの小国からなる連合国家だったのではないのでしょうか。

「記紀」では天岩戸からでてきたのちのアマテラスの立場は一変しています。天孫降臨の物語において、主導権がタカミムスヒ（高皇産霊）に移っているのです。『日本書紀』では、タカミムスヒは、自身の娘とアマテラスの子、アメノオシホミミ（天忍穂耳）との間にできた子、ニニギ（瓊瓊杵、アマテラスとタカミムスヒの孫）を葦原中国の君主にしたいと思い、諸神に相談し、葦原中国を平定するためにアメノホヒ（天穂日）やアメノワカヒコ（天稚彦）を派遣したが、オオナムチ（大己貴）に懐柔されてうまく行かず、最後に、フツヌシ（経津主）とタケミカヅチ（武甕槌）を送り、オオナムチに対して五十田狭（イヌ）の浜で「国譲り」を強く要求した。オオナムチは子のコトシロヌシ（事代主）に相談し、国譲りを承諾した。そののち、タカミムスヒはニニギを真床追衾に包んで降臨せられた、と書かれています。その間、アマテラスはでてこないのです。『古事記』においても、最初にアマテラスが我が子、アメノオシホミミに豊葦原の水穂の国を治めさせようとアメノオシホミミを天降すが「水穂の国は騒いでいる」といつて戻ってきてしまう。そこからタカミムスヒがアマテラスとともに諸神を集めて相談しています。アマテ

ラスを同伴していますが、やはりタカミムスヒが主導的に描かれています。そのタカミムスヒは『古事記』では天地が分かれ始めたときに高天原で生まれた最初の三柱（アマノミナカヌシ・タカミムスヒ・カミムスヒ）の神の二番目の神として紹介されていますが、『日本書紀』の本文では、最初の三神はなく、神代七代の神にもでてきません。一書第四にでてくるだけです。本文だけをみると天孫降臨の場面で突然何の断りもなく皇祖タカミムスヒとして登場するのは、つまり、タカミムスヒは倭国の神ではないといっているのに等しいのです。このタカミムスヒを張政に置き換えると話が通じるのです。

つまり、張政は豊国王女台与を新女王に立てて豊国を筑紫国と合併し、狗奴国に対し絶対有利の状況をつくりだしました。そうした上で、狗奴国に降伏を迫ったと考えられます。降伏の条件は、日向国の豊国への割譲、官つまり政務王であるクコチヒコ（狗古智卑狗）の出雲への追放、そして本拠熊本の地の安堵です。これは絶妙の条件だと思います。豊国は日向という豊後から南に続く日当たりのよい広大な土地を得られ、一方、狗奴国は本拠である熊本平野や阿蘇地方が安堵されれば不満はないでしょう。クコチヒコにしても、命を取られるのではなく、当時おそらく繁栄していた出雲へ出向き、そこを征服すれば、領地とし国王になれるのであればそれほど不満はなかったでしょう。出雲は鉄の産出するところです。領地にすれば大いに繁栄が見込まれるのです。後の出雲の国譲りの事件は、その鉄の採れる領地を大和朝廷が欲しがり、譲渡の要求をしたためにクコチヒコの反発を買ったのだと考えられます。さて、狗奴国はその条件をのみ、筑紫国・豊国・狗奴国（のちの肥国）の三国統一が成立することになりました。張政は日向地の割譲を要求するため、台与の臣下を狗奴国の政務王のもとに派遣したのです。政務王は日向国を治めていた二人の王に相談し、最終的には承知させたということになったのです。派遣先が出雲になっていますが、これは神話の天孫降臨の前にスサノオ（クコチヒコ）を出雲に追放しているのも、物語の継続性を保つために、出雲にいるスサノオの子のオオナムチに談判に行ったということにしたのでしょう。神話の作り方として、日向の国譲りと出雲の国譲りの二つの事件を混合してつくったのではないかと思っています。

## 肥国（建日向日豊久土比泥別）

『古事記』では、イザナギとイザナミの国生みの物語のなかで、筑紫島（九州）について、「この島もまた、身は一つだが、面（国）は四つある。面毎に名がある。筑紫国を白日別（シヅヒク）といい、豊国を豊日別といい、肥国を建日向日豊久土比泥別（タケヒムカヒトヨクジヒネク）といい、熊襲国を建日別（タケヒク）という」とあります。日向国はありません。注目されるのは肥国で名を「建日向日豊久土比泥別」という、と書かれていることです。熊襲国を建日別という、とあるので、名のはじめの「建日」は熊襲を表しているのではないかと推測されますが、あとの「向日豊久土比泥」はわかりませんでした。文献にもほとんど説明がありません。しかし、何度も字面を眺めているうちに、これは「日向を豊国に譲った建日別（熊襲）」という意味を表そうとしているのではないかと思うようになりました。それは、「久土比泥」という語について、天孫降臨神話の場面で「高千穂の久土布流多気」に降臨したとあります。「久土」は「亀旨（キ）」で朝鮮半島六加耶の建国伝説にでてくる始祖の降臨した山の名で、「布流」は「フル」で、朝鮮語で「都」の意だといわれています（金達寿『日本古代史と朝鮮』講談社学術文庫）。そうすると「久土」は「降臨する」意に考えられ、「比泥（ヒネ）」は、ヒネ＝ヒナ＝夷、つまり、田舎（ひなびた地）ではないかと考えられます。そうすると、「建日向日豊久土比泥別」は「豊を日に向かった辺鄙な地（つまり日向）へ降臨



させたところの熊襲（建日別）」ということになるのではないかと考えました。

つまり、肥国はもともと狗奴国＝熊襲（建日別、九州南部とは別の氏族）であったが、日向を豊国に譲って筑紫国・豊国に併合されたのちは熊襲ではなくなったので、「肥国（建日向日豊久士比泥別）」としたものと考えられるのです。『日本書紀』の景行天皇の熊襲討伐の項で、八代方面を「火の国」と名づけたとあります。また『古事記』に、景行天皇が日向のミハカシ姫を娶って生んだ子は豊国別王といい、日向国造の祖とあり、日向が豊国の領地であることを示しています。

日向への天降りは、実際には、豊前京都郡から海路で日向へ行ったと考えられます。『豊前風土記』宮処郡の逸文に、「古、天孫、ここより発ちて、日向の舊都（旧都）に天降りましき、けだし、天照大神の神京なり」とあります。また、日向市の海岸にある大御神社（二〇〇三年、巨大な「さざれ石」がみつき一躍有名になりました）の由緒には、「天孫降臨時、瓊瓊杵尊がここを通過した際、皇祖天照大神を奉祀して平安を祈念したと伝えられている」とあります。神武天皇の東遷は、日向から海路を採っているし、後の景行天皇の熊襲討伐の際も、日向までは海路を採っています。日向には、海路を採る方がはるかに簡単に行くことができるのです。それに、次に示すように、豊国は関門を抑え、瀬戸内海や出雲と交易していた海洋交易国家だと考えられるのです。

## 豊国・投馬国

台与が豊国の王女とすると、豊国はどのような国であったのでしょうか。

前述のように、投馬国は投与国つまり豊国であると考えられます。「与（與）」の字は行書体で書くと「馬」とよく似たところがあります。台与の使節が朝貢した時に中継の元の都豊国の名を「トヨ」と言ったのを聞き返されて「トヨ」と声をはり揚げた。それを速記係が「投与」と書いたのを清書するとき、あるいは写書するとき「投馬」と読んでしまったということが考えられます。

ですから、倭人伝にでてくる投馬国は、台与と張政が統一したあとの筑紫国・豊国・肥国・日向国、つまり、鹿児島県を除く九州本土＋長門国（山口県西部）を指すことになり、「投馬国五万戸」の記事はこの地域の総戸数ということになります。そのことは本会の私の投稿論文（2020年7月「卑弥呼女王国は二万戸だった」）に示しています。澤田吾一氏の推測した奈良時代の各地の人口から、三世紀半ばのこの地域の戸数を推測すると約五万戸（三十万人余）くらいになるのです。因みに、邪馬台国は、畿内に播磨・備前・備中・讃岐を加えて七万戸（四十五万人程度）ぐらいと計算されました。

また、投馬国の官名は「弥弥(ミミ)」副官は「弥弥那利」とあります。「記紀」のなかにも、オシホミミ（忍穂耳〈記〉、ニニギの父）、をはじめ神武天皇の皇子として、タギシミミ（多芸志美美〈記〉、手研耳〈紀〉）、キスミミ（岐須美美〈記〉）、カムヤイミミ（神八井耳〈記紀〉）、カムヌナカワミミ（神沼河耳〈記〉、神淳名川耳〈紀〉）と建国当初の皇太子級の人物に「ミミ」が付けられています。「ミミ」は尊称と考えられ、投馬国とその後の天皇家とは密接な関係があることをうかがわせる記事です。

「記紀」のもとの物語をつくったと私が考えている厩戸皇子は「豊聡耳」と称し「ミミ」が付き、推古天皇の和風諡号は「豊御食炊屋姫」で即位した宮は仲哀天皇の宮の名と同じ「豊浦宮」です。『古事記』で、台与とみられる「月読神」に命じられた統治先は「夜の食国」でした。厩戸皇子・推古天皇の名が天皇家始祖の名にちなんでいることがうかがえます。

もとの豊国は、現在の地名から豊前・豊後が考えられますが、それだけではなく、遠賀川流域の大部分

も豊国の地であったと思われます。私は紀元前から二世紀にかけて甕棺墓制があった地域を倭奴国あるいは卑弥呼女王国と考えていますが、遠賀川流域で甕棺墓が出土するのは飯塚市周辺の一部に限られているからです。神武天皇が東遷の途中に寄った遠賀川河口付近の岡水門(カミト)も豊国の範囲だったでしょう。遠賀川流域は英彦山(彦山、日子山)にアメノオシホミミを主神にイザナギ・イザナミが祀られているのをはじめ、イザナギ、イザナミを祀る神社が特に多くあります。豊国の領地はそれだけではなく、関門を渡った山口県西部沿岸も占めていたと思えます。この地方も「豊」の字がつく地名が数多く残っており、前述の豊浦宮は下関市にあったと考えられています。考古学的には土井ガ浜タイプ人骨の人たちの支配する国と考えられます。

また、『古事記』の国生みの物語のなかで、淡路島、小豆島、吉備児島、大島、姫島と瀬戸内海の島がでてきます。なぜこれらの島々が挙げられたのかを考えると、豊国が東の大阪方面との交易をするための基地となる港を設けていたところではないかと推測されます。大島を難所である来島海峡のある大島または大三島とし、寄港地として松山市の伊予二名を加えると、ほぼ等間隔になるのです。淡路島を作り損ねた島としたのは、通過する明石海峡側に良港をつくることのできる湾がないからだと考えられるのです。

## 神功皇后の新羅征討

住吉神が張政とするならば、張政が在倭中に新羅攻略を行なったこととなります。この神功皇后の新羅征討の記事は架空の話だとする説が多いのですが、私は真実の可能性がかなり高いと思っています。

一つは福岡県から佐賀県にかけて神功皇后の新羅征討の伝承に満ちているとっていいほど多くの場所で、その伝承が残っているのです(河村哲夫『神功皇后の謎を解く』原書房、2013年)。もう一つは、朝鮮半島の『三国史記』新羅本紀に「二四九年、倭人、舒弗邯(シヨフカン)(一等官位)于老(ウロ)を殺す」とあるからです。

この『三国史記』(高句麗・新羅・百済の三国の歴史書、新羅の金富軾編纂)は、その編纂が十二世紀であり、編纂から九百年も前の三世紀の記事など信用できないというのが通説ですが、記録が残っていれば、そして三国の正当化に関係のないところ、特に外交関係は相手国の歴史書と照合して記述したであろうと考えられるので、すべてが偽りとはいえないであろうと思うのです。たとえば、新羅本紀に「西暦五九年、倭国と国交を交わす」という記事があります。その二年前の五七年には後漢書に「倭奴国に金印を授けた」という記事があり、福岡県の志賀島からその金印が見つかり、わが国の歴史上の大きな事跡となっていることがあります。『三国史記』の編纂者は、たとえ倭国との国交についてその実年まで記録になかったとしても、こうした外国の記事と照合すれば、実年に近い年を比定することができると思うのです。この記事から倭奴国が五七年に後漢に朝貢した理由が浮かび上がります。真の目的は新羅と対等の国交を結びたかったからだと思うのです。それまでは、新羅国から対等に扱ってもらえなかったことが想像されるのです。幕末の日米通商条約をみればわかります。相手国から格下に見られれば対等の国交は難しいのです。新羅国と同じように、後漢朝に朝貢して国として認められてはじめて対等の国になったのです。それまでは、新羅国からは倭奴国は、国ではなく、ただの野蛮集団と見られていたのではないかと想像されるのです。

『三国史記』新羅本紀には「倭人侵入」の記事が紀元前五〇年から何度も見られます。これだけを見る

と倭人が好戦的に見えるかもしれませんが、私は逆だと思っています。洛東江河口付近の狗邪韓国、現在の金海市あたりとされていますが、倭人伝に「倭の北岸」と書かれている所で、そこには倭人が住んでいたと考えられます。新羅（当時は辰韓）は半島南東部の国で、発展しようと思えば、海外に向かって行ける港が必要で、そのためには、どうしても洛東江河口を領地にする必要があるのです。ですから、その河口にある狗邪韓国を征服しようと執拗な攻撃をかけていたのだと思います。狗邪韓国は九州の倭奴国と同盟関係にあり、危急のときは軍事援助を求め、一方倭奴国は軍事援助の報酬として鉄を得ていたと考えられるのです。倭奴国は鉄を得たくても交換物資に乏しく、傭兵は好都合だったのです。ここでも、住吉神を張政と考えると話が通じます。張政が来倭した直後に、狗邪韓国から軍事援助を求められたのだと推測されるのです。張政はそれに応じたのです。張政の実力を内外に示す絶好の機会と思ったかもしれません。あるいは、前年に帯方郡の営所が韓軍に攻撃され、上司であった帯方郡太守が戦死しているの、その仇を取ろうと思ったのかもしれません。

この「倭人、于老を殺す」という記事は、事の顛末を書いていない、ところにその異常さがあるのです。他の倭人侵入の記事は、そしてどうなったかを必ず書いているのです。なので、この記事はその顛末を書けなかった理由があると考えられるのです。「于老列伝」には年を違えて一応書いてありますが、作り話のようです。それは、列伝に、わざわざ年を違えて記述する、というのも怪しいし、中身も、「倭王の悪口を言ったのを倭王にとがめられ、言い訳に行ったところ殺された」とするもので、新羅本紀には、于老は以前（二三年）倭国軍と戦い、それを撃退し多数の倭人を殺しているのです。倭国から目の敵にされている状況なのです。そのような状況で、列伝に書かれているような話で倭軍のところに赴くことなど考えられません。暗殺の手段はわかりませんが、ともかく新羅の王族であり、將軍である于老は殺された。想像するに、新羅は倭人の将がどういう人物なのかを探ったところ、帯方郡の軍師だとわかった。抵抗すれば次に何を仕掛けてくるかわからない。反撃して首尾よく軍師を討ち取ったら、帯方郡がだまっていなかったら。新羅は先に帯方郡に攻撃を仕掛けて帯方郡太守を討ち取ったものの、反撃され大敗を喫し、降伏したばかりで、軍勢力も衰退している。今回はだまって金・銀を渡しお引き取りを願うしかないと考えたのではないのでしょうか。同行した神功皇后（台与）は、張政の隠密の「于老暗殺」を知らず、新羅に押し寄せただけで、新羅がおそれいり、宝物を差し出してきたと思ってしまったということではないのでしょうか。

『日本書紀』では、神功皇后のこの話が西暦二〇〇年ころと前にずらされ、その他の事績は一二〇年ほどあとの事件が採られているのは、神功皇后が台与であることをあからさまには悟られたくないということもありますが、それ以上に重要なのは、子の応神天皇、この天皇が初代天皇であったと考えられるのですが、それを四世紀末（継体天皇から約百年前）のことと見せかけようとしたためではないかと考えています。つまり、継体天皇の出自を応神天皇の五世の孫としたいためです。これは継体自身が自分は応神天皇の五世だ、と自認・自称していた可能性があるのです。過去のことについて確たることが立証できない時代において自分を有利な方へ自称することは可能だったでしょう。だが、その系譜を示すことはできない。そのことを受け入れて歴史を取り繕うため、仁徳天皇の後を継いだ天皇の名がイザサワケであったのを「氣比の神との名の交換」という物語をつくって、この天皇の名も応神天皇ということにし、その天皇から五世孫としたと考えられるのです。つまり継体天皇の権威を保つために、始祖天皇応神の五世孫ということにしたかったのです。ですから、物語の流れを「応神→仁徳→応神（イザサワケ）」とするわけにもいけませんから、仁徳天皇のなかにも応神のなかにもイザサワケの事績が入っているのです。

それで、仁徳の在位期間が八十六年という異常な長さになっているのだと思います。イザサワケの皇后は仁徳天皇の最後の皇后、八田皇女なのではないかと思っています。仁徳天皇と応神天皇の事績が混同されているという指摘は多くの人によってなされています（たとえば直木孝次郎『日本神話と古代国家』（講談社学術文庫）など）。

継体天皇の応神天皇五世孫については、『釈日本紀』に載っている「上宮記」逸文に、継体の五世前の人物として「ホムツワケ（凡牟都和希）」が挙げられています。通説ではこれをホムタワケ（誉田別）と同一人物と解釈していますが、ホムツワケは垂仁天皇紀に皇后サホヒメ（狭穗姫）との子（誉津別、『古事記』では本牟智和気）として、「記紀」にはホムタワケ（応神）とは別人として記されています。応神天皇の気比の神との名の交換の説話といい、ホムタワケとホムチワケと極似の人物名を登場させることといい、この辺になにか隠蔽しようとした何かがあるような気がしたのです。

## 張政の帰国

おそらく、張政はこの三国合併を見届けて帰国したと考えられます。合併という形で、魏の友好国である倭国を今までとは比べものにならないほどの強力な国に仕上げ、魏の関与する土地をさらに南へのぼしたのです。このことは、長年争ってきた呉に対して、東の方から脅かす手段が生じたことになり、大きな成果です。倭国の位置について、その行程を五～六倍に伸ばしてあることについては、『三国志』魏書十一卷「国淵伝」に「賊軍を撃破した場合の公式文書では、その成果を、一を十と（十倍に）表すのが習慣」とあること、また、早稲田大学の渡邊義浩教授が、倭国の位置を都洛陽から一万七千里、帯方郡から一万二千里として、「親魏大月氏王」の印を与えた国と同じ遠さにすることは、倭国に「親魏倭王」の印を与えたときからの公式見解であった、といっておられること（『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2012年）から、張政はこの公式見解に従ったのだらうと思います。いずれにしても、張政の挙げたこの成果なら皇帝から賞される内容でしょう。

倭人伝の最後にあるように、台与は大夫ら二十人の使者を張政につけて臺に詣でて奴隸や宝物を献上した。そこで、使者は今回の張政派遣の礼をし、皇帝からは台与が倭国の女王であることをあらためて認定されたものと思われます。さらに、倭国を安定、発展させるために南方あるいは東方へ領土を拡大するように命じられたことも考えられます。

さらに重要なことは、台与が倭国からの申請ではなくて、魏国（張政）の指名で倭国王になったことです。このことによって、倭国内で台与王朝を倒して、代わりに倭国王認定を中国側に申請することは難しくなったと考えられるのです。それがアマテラスの「葦原の中つ国はわが治める地なり」と日本列島の統治権を主張する言葉にあらわれていると思います。そして大多数の豪族たちが、この言葉にしたがったのも、上記の事情を、豪族たちが認知したからだと考えられます。

その後の張政については、森浩一氏が、『帯方太守張撫夷』と型押しされた墳丘内部の墓室のレンガ』のあることを『朝鮮古跡図譜』（旧朝鮮総督府刊行）から発見されています（『倭人伝を読みなおす』筑摩書房 2010年）。古墳の場所は、帯方郡治とみられる黄海道鳳山郡智塔里の土城跡から八キロの場所で、その年代は二八八年ごろと見られるといえます。「撫夷」とは「東夷を鎮撫する」という意味であるので、張政が倭国を統一したとしたのなら、ぴったりの名であり、この人物が張政だったのではないかとされています。

## 神武天皇の東遷

台与は、張政の帰国に際し使節団を同行させ、西晋の皇帝に貢献し、皇帝から改めて倭国の女王の認定を受けたものと推測されます。そして当時の領地の東方の倭人の住む地も、その統治権を認可されたことも想像されます。台与の王家が統治していた豊国は、瀬戸内海を通して交易していたとすれば、瀬戸内の東端近畿地方からさらに東へ遠く倭人の土地が続いていることは知っていたに違いありません。

そこで、すでに都ができていた大和の地を併合し、豊国の都をそこへ遷そうと計画したのであらうと考えられます。

台与は東へ支配地を広げるにあたり、「中国魏から任命された倭国王」という権威のもとに、瀬戸内海を通じた交易の縄張りの領域の国々に対して、権威王つまり連合国家の祭祀王として君臨するということが連合を呼び掛けたのではないのでしょうか。そのようなことであれば、各土地を治める豪族たちもその土地の主権が奪われるわけではないので、特に野心を持っている豪族以外は共通の「祭祀王」を戴くことに、あえて抵抗はしなかったと思われる。

豪族たちにも、大きなメリットがあります。連合することにより、それまでの、互いに敵視し合う緊張した関係はなくなり、争い事が起きてもそれを調停する上部の機関ができ、平和的に解決する手段を共有し、相互の交易を密にすることにより、平和で連合国全体の生活・文化を向上させることができます。

纏向遺跡は東西の交易を行なう物流センターであったのではないかと考えています。「大市」という地名があったとされていますし（『日本書紀』崇神紀）。東西の物資が多く発見され、その中に人々の生活の跡が見られないという特色を考えると、そういう交易をおこなう場所というのがぴったりという感じなのです。そのようなお考えの研究者もおられます。西側のニギハヤヒと東側のナガスネヒコの共同経営だったのではないのでしょうか。

天孫降臨においては、天降ったのは皇室からは天孫ニニギ一人で、他はお供の家臣です。その後、アマテラスをはじめ、王家の人々が日向に降った物語はありません。つまりニニギは新しく領地になった日向を統治するために送り込まれた皇子と考えるべきだと思います。日向でのニニギから神武天皇までの四代の神話は歴史を古くみせかけるための挿話だと思います。実年代的にはニニギ＝神武天皇なのです。海幸彦・山幸彦の神話は、その類型がミクロネシアからインドネシアにかけて伝承されており、隼人と呼ばれる海人系の人々が伝えていたものを取り込んだとも考えられるのです（井上光貞『日本の歴史1 神話から歴史へ』中公文庫）。

そして、台与は、都を大和へ遷すために、日向へ送り込んでいたニニギ（＝神武）にこんどは大和の平定を命じたのです。神武は東遷にあたり、吉備までは戦いをまったくしていません。そして吉備で大和攻略のための準備をしています。そのことは吉備まではすでに友好関係を得ていたこととなります。豊国が交易国家であったればこそなせる業です。交易国家はどの国とも友好関係を保ち敵国をつくらないようにしているのです。

大和征服における苦戦は創作物語だと思います。全般に、神話の項、歴史の項を問わず、歴史の大筋は事実として伝わっていても、細かいところは伝わっていないので、造作されたと考えています。熊野まで南下してから上陸するというのは、その地形からは考えられないことです。せいぜい紀伊川からの侵入でしょう。苦戦の物語にしたのは、神武を初代天皇として英雄化しなければならないことと、戦いのなか

で、高倉下命の剣や八咫鳥の案内など、アマテラス（台与）からの後方支援もしっかり行なわれたことを強調するためであったと考えます。

私の説は、考古学者の寺沢薫氏（纏向学研究センター所長）が、今年元旦 NHK 放送『邪馬台国サミット 2021』で提言され、多くの賛意を得られた「邪馬台国談合論」と同じような政治形態となると思われる。すなわち、氏は、西日本各地の豪族たちが連合して邪馬台国を大和に作りあげ、その大王は女性であった、と言われていました。暗にその女性は卑弥呼と考えておられるのではないかと思います、それが台与に替わっているのが私の説で、台与が「中国魏より任命された倭国王」という権威をもとに、連合を呼び掛けた、というものであります。それはまた、佐古和枝氏が先の「邪馬台国サミット 2021」で発言されたところの「卑弥呼の国と台与の国の記事は別の時期、別の場所にあった」という見解とも符合します。

豊国は、瀬戸内海を東西に交易していて、西日本が主な交易の縄張りであったとすれば、この範囲をまとめることは、かなり容易であったと考えられ、おそらく、長くとも数年～十年くらいで、西日本統一が成し遂げられたのではないと思います。その時期は卑弥呼が死んだ西暦二四八八ころから西晋に朝貢した二六六年の間と考えられます。

## 作られた系譜

祭祀王としての天皇の系譜は、卑弥呼→台与→応神→仁徳→応神（実はイザサワケ）→履中→、ということになると推測されます。ところが、天皇家以外の人々が認知していた史実は、そうではなくて、神武が日向から東遷してきて、大和に王朝を築き、以後その王朝を維持し、大和を統治してきた政務王たちが認識されていたでしょう。祭祀王である台与や応神の姿は外部の人々には見えない存在だったと思われる。歴史書をつくるにあたって、この認識の差をいかに克服するかという問題が生じたのだと思います。そして、もう一つの課題、国家形成の起源を紀元前七世紀ごろにするという課題、さらに継体天皇が出自を応神天皇の五世孫と称してしまっていること、をかねて考えた結果、四世紀末のイザサワケを「気比の神との名の交換」という説話をつくって応神天皇とし、仲哀天皇の前に歴代政務王たちを並べるという系譜を考え出したのだと思います。

したがって、神武天皇から成務天皇までは、実際に大和の地を統治した政務王ということになります。そして成務天皇の後を継いだイザサワケ（名を交換して応神天皇）が祭政兼務の天皇として君臨したと推測されます。系譜としては挿入された祭祀王の部分をできるだけ短くするために、真の初代応神と履中の間を一人の天皇「仁徳」だけにし、初代応神と履中の中のイザサワケを含む祭祀王たちを仁徳という名の天皇の中に押し込めたのです。そして、その応神の前に母親の台与（神功皇后）。その前に男王（仲哀天皇）を台与と夫婦という話に変えて挿入したということだだと思います。そうしておいて、神功皇后、応神天皇の事績に、四世紀末の事績を盛り込んだ、ということではないでしょうか。ですから、神武天皇から成務天皇までの統治期間は台与から仁徳天皇までと同時代だということになります。神武天皇から成務天皇までの性格が政治的で好戦的であることは多くの研究者によって指摘されているところです。成務天皇と仲哀天皇の間で王朝が変わったと指摘されている研究者もたくさんおられます。

また、魏志倭人伝に、「邪馬台国の官は伊支馬（イキマ？）、次は弥馬升（ミマス？）、云々」とあります。これに対して「記紀」に垂仁天皇は、イクメイリヒコ、皇后はヒバスヒメという、とあります。この

イキマとイクメ、及びミマスとヒバスは音が似ています。邪馬台国（ヤマト）の官（政務王）はイキマ（イクメ）次の官はミマス（ヒバス）ではないのか。台与と垂仁天皇が同時代と想定すると、このようなことも考えられるのです。

さらに、景行・成務・仲哀・神功皇后・応神・仁徳の六代に仕えたという武内宿祢の活躍期間も六十年間ほどに縮まり、実在の可能性が高まるのです。武内宿祢は台与（神功皇后）が神託を受けるときの審神者(サマ)だったのではないかと思います。

## 考古学的知見との合致

以上の事柄は、考古学的知見ともよく一致しています。

\* 纏向遺跡は三世紀に入って突如として出現し、それが三世紀後半に突如として三倍の規模に拡大したといいます。これはニギハヤヒ（饒速日）らが三世紀前半に巨大流通センターを纏向に築き、三世紀後半になって神武が東遷し都としたため、規模が一気に三倍になったと考えられます。

\* また、三世紀になってから纏向遺跡周辺に前方後円墳が矢継ぎ早に築造されています。神武から成務までの天皇が祭祀王ではなくて、実際に奈良盆地を統治した政権担当者たちであったとすると、三世紀に大型の前方後円墳が数多く築造されたことを合理的に説明できます。

\* 纏向遺跡から出土する西方からの遺物は北九州のものは少なく、吉備やその周辺のものが多い。このことは、神武たちが筑紫国ではなくて、瀬戸内海を東西に交易する交易国家豊国の王室であり、瀬戸内の国々とは交易の相手国として友好関係にあったからだと考えられます。

## おわりに

以上、『魏志』倭人伝の解明において、卑弥呼女王国・邪馬台国の位置については、「陳寿が複数の史料から行程を考えだしたもの」という仮定を設け（2020年一月本欄掲載）、従来の説とは異なった合理性の高い位置関係を見出しました。そして、今回は倭人伝以後の展開の解明において「卑弥呼が大和朝廷に関係するのならば、「記紀」に比喻された形で卑弥呼に限らず、台与や狗奴国の官・狗古智卑狗、張政なども出てくるはず」という仮定、及び『記紀』のもとになった帝紀や旧辞をつくった天皇がいる」という仮定のもとに、『古事記』『日本書紀』の中に、それらの人物が比喻されて登場していることを見出しました。そして「記紀」の中に記された多くの謎めいた話を解明することができたと思っています。

しかし、「記紀」と考古学から得られる事実とつじつまがあうからといって、即それが真実だと言えないのも事実です。この説はあくまで可能性のつなぎ合わせだからです。現在の段階では遺跡から発見される遺物の実年代の推定にも50～100年の誤差を見込まなければなりませんし、「記紀」の記述の真偽の仕分けも証明が難しいからです。けれども、歴史は連続するものですから、長い期間においてつじつまの合う説明が求められるのも事実でしょう。歴史の一場面だけをどれほどよく説明できたとしても、つぎの時代へつながらなければ真実の可能性は低いのではないのでしょうか。

しかし、このように、従来の仮定とは別の仮定を考えることにより、古代史解明の新しい展開が得られるのではないかと思います。私の提案した仮定に限らず、従来の仮定を検討し直し、新しい仮定のもとに『魏志』倭人伝や『古事記』『日本書紀』を分析することにより、新しくより説得力のある説が提出され

ることが期待できます。諸氏の新しいご提案を期待しています。

#### 紹介文

『邪馬台国と狗奴国はその後どうなったか——スサノオは狗古智卑狗——』田口紘一（会員番号 10408）

魏志倭人伝のその後を推論するために、帯方郡から派遣された張政の働きを記紀から推測した。記紀には卑弥呼をはじめ、次の男王、台与、狗古智卑狗そして張政まで主要メンバーすべてが名を変えて登場している。